

地球研プロジェクト「日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討」

2009年全体集会

近畿班報告

これまでの成果と

第3巻 『林と里の環境史』の構想

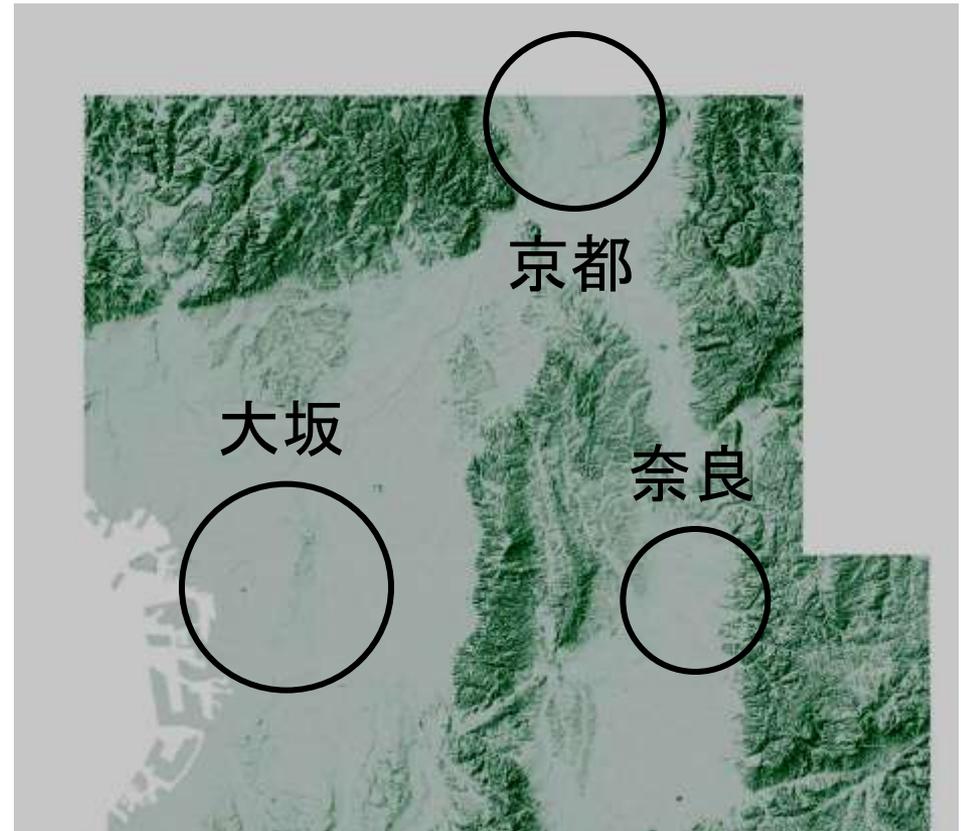
# 近畿班の目的

## 森林資源と利用のバランス

- ・ 林政学永年の議論
- ・ 全国については、すでに優れた概論(タットマン 1998など)

## 近畿のスケールで検証する

- ・ すぐれて都市、政権、資本と関連
- ・ それゆえ激しい森林改変の歴史を持つ





# プロジェクトからの宿題

## 「賢明な利用」とその破綻を分つ条件は？

- ・ 持続的利用を望む人々と、破綻を厭わぬ人々との綱引きで、利用制限のあるなしが決まる？
- ・ 誰が誰のために利用するかが重要では？  
ウチの人たち→ウチの人たち, ウチの人たち→ソトの人たち, ソトの人たち→ソトの人たち

## 「持続」の退行遷移仮説

- ・ 資源持続的利用の破綻は次の低位での持続へとつながる？

## 重層する環境・資源ガバナンス仮説の整理

- ・ 階層間の拮抗が抑止力となるか？

## 上の仮説あるいは主張を支える論拠の確立

- ・ 近世近代の統計データ、マップ、史料集など、論じるための根拠としてのデータ群や史資料群のセット

# 近畿班としての問題設定

「持続的」な利用とその破綻を分つ条件は？

- ・ 資源供給者と利用者は、それぞれ地域共同体内部か外部か？
- ・ 資源持続に対する関心・管理の有無？
- ・ もっと他の要因？

重層する環境・資源ガバナンスの存在とその役割は？

\* 近畿の森林利用の歴史を拾いつつ、奥山一里山地域で検証

# 検証：奥山における人の森林への関与

『水野章二 古代・中世の山林利用と相論』

## 古代における天然林大径材の大量消費と枯渇

- ・ 繰り返された権力者による都・社寺建設(タットマン 1998など)

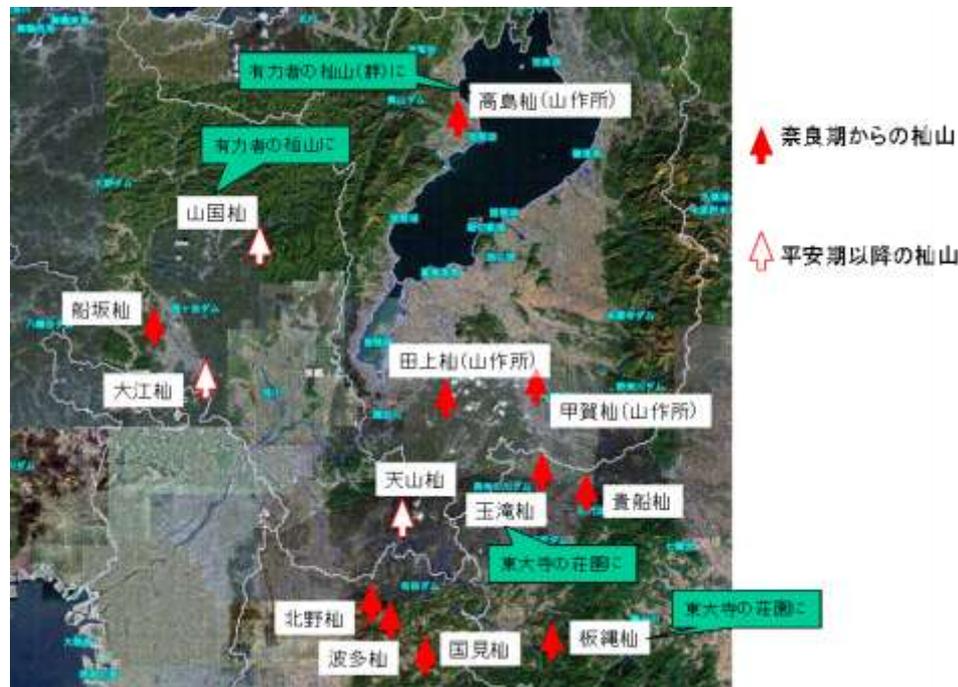
## 奈良・平安期には貴族・大寺院により杉の設定

- ・ 水系で都につながる山林+宗教的聖地
- ・ 外部による山林囲い込み=消極的な管理・資源枯渇は問題視していた
- ・ 都市へ木材供給を行う

× 山が浅い甲賀・伊賀・田上の杉では、鎌倉期には資源枯渇 → 荘園に変化 植生もアカマツ林化

○ 広大で山が深い朽木・山国では、中世以降も木材供給持続

！ 荘園化 → 中世村落の形成  
→ 里山の揺籃となっていく



# 検証：奥山における人の森林への関与

『森本仙介 吉野地域における林業と木地屋－都市商人の関与』

## 近世の持続型林業成立（所1969など）

- ・ 外部の新たな需要の発生（江戸への清酒移出用樽の需要など）と資本の投下
  - ・ 天然林材の枯渇・奥地化に伴う人工林のコスト競争力が発生
  - ・ 造林技術、生産の新たな技術・システムの発展
- 18Cに吉野や山国などで、植林と集約的な管理による木材生産始まる。
  - 吉野では持続的資源生産を基盤に、多様で総合的な林産業社会が形成

近代・明治以降は国家政策に取り込まれていく・・・国有林化・資源計画



# 検証：里山における人の森林への関与

『水野章二 古代・中世の山林利用と相論』

## 古代・中世に遡る里山的利用

- ・ 天然林資源減少に伴い、杣に中世村落が成立し、周囲は里山化（近隣山）
- ・ 農地の拡大、農業技術の進歩 → 緑肥の需要増加
- ・ 資源管理は消極的手法 → 囲い込み、締め出し、宗教的理由による禁止など
- × 13Cに近江伊香立荘は、薪炭資源枯渇に伴い葛川荘へ侵入、争う → 領主への炭木寄進など、外部への供出が過重であった
- × 13Cに山城木津川流域では山林が荒廃し、社寺への薪調達を勤める荘園間で激しい境界争い → 大都市、京都・奈良に隣接し外部への供給過重
- × 13Cに大和平野殿荘では、マツタケ山が野山になりマツタケ枯渇し寄進できず
- ? 13Cの近江饗庭野では、地域内部利用の資源（薪炭・緑肥・秣）をめぐる争い。農地開発進んだ平野部で、山野への負担高まる → 江戸期の山論の原型
- ? 15Cには近江湖北では、森林資源枯渇を受けて、地域内部で積極的な資源管理成立 → 細かな伐採制限・規則 緊急時の備蓄林の整備（勘合山）

！一部では造林、計画的伐採管理の萌芽も！

# 検証：里山における人の森林への関与

『堀内美緒 作業日記からみた里山利用』

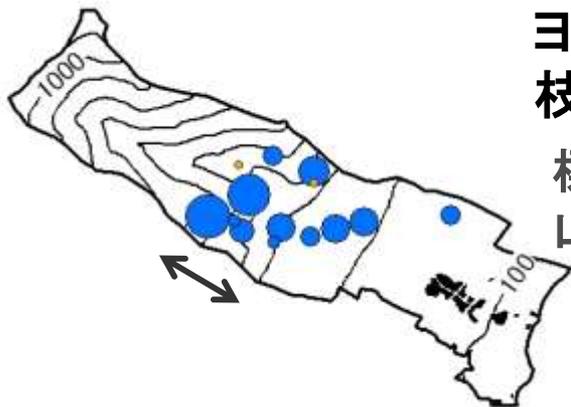
『深町加津枝・奥敬一 近畿地方の森林利用に関する比較研究』

## 近世・近代には資源利用システムが成熟

- ・ 資源、場所、利用者に応じ、多様で細分化された**持続的**資源利用システム
- ・ それを支える**森林資源管理**技術体系、利用規則が整備されていた
- ・ それらのシステムは、**共同体内部**の組織により保障されていた

○ 20C初頭の比良山麓では、**内部**(農用など) + **外部**(薪の移出など) 向けの多様な生産が地域民により行われ、複雑な土地利用が発達

○ 20C初頭の丹後半島でも、**地域内部**の農・生活用の生産に応じた土地利用



### ヨクサ(木の若枝や草)利用

標高300~500m  
山地, 家くじ山



### マツ利用

標高150~300m  
山麓・低地,  
私有林

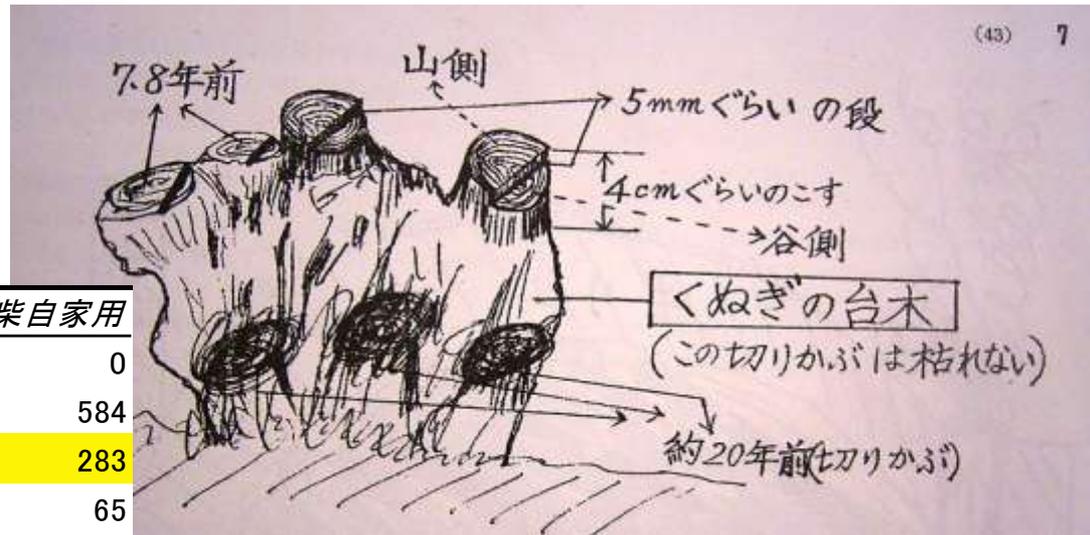
# 検証：里山における人の森林への関与

『佐久間大輔・伊東宏樹 北摂と京阪奈の里山経営』

## 近世・近代には資源利用システムが成熟

- 近世以降の北摂では、**地域民**により、高度な萌芽林管理技術による**商業的薪炭生産**が繁栄
- △ 近世～近代の京阪奈丘陵では、**地域民**は**商品生産**に徹した里山利用  
…森林保全は考慮しないが**収奪**ではなく**栽培**中心、**水系管理**も徹底

	炭	薪販売用	薪自家用	柴販売用	柴自家用
大阪市	0	0	0	0	0
三島郡	57	174	219	89	584
北摂	251	78	77	53	283
泉北	5	6	43	3	65
泉南	0	48	32	21	26
南河内	127	17	50	9	56
中河内	0	3	8	0	4
北河内	0	1	15	1	8



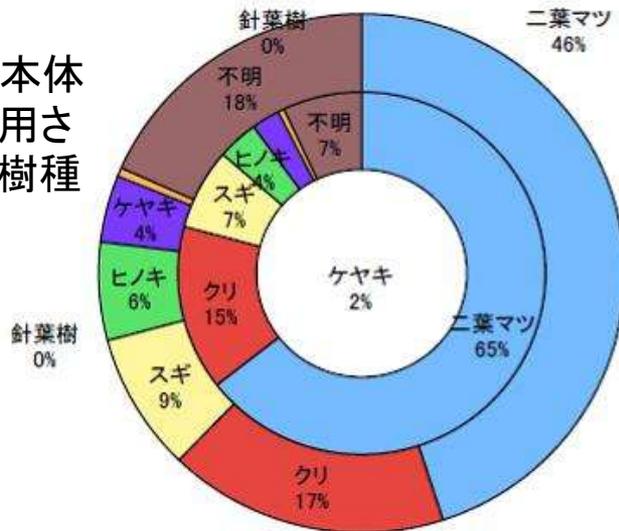
# 検証：里山における人の森林への関与

『奥敬一ほか 民家の材料からみた里山利用』『大住克博・佐久間大輔 資源利用と萌芽』  
『井之本泰 京都府北部の植物繊維の利用—宮津市上世屋地区を例に—』

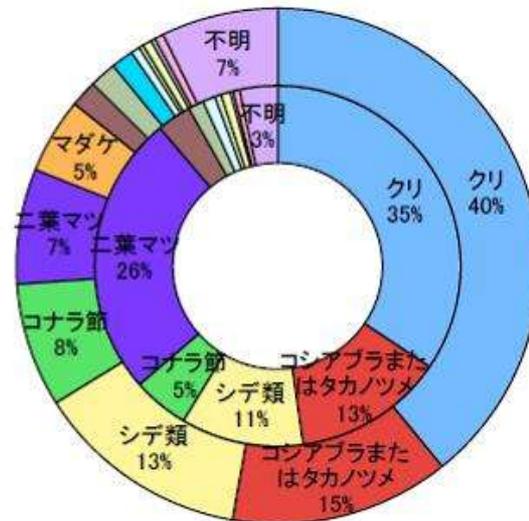
## 持続的利用を支えた民俗知

- ・ 地域内部で伝承する知識と技術
- ・ 環境に応じた地域性
- 再生可能な地域資源利用に徹した民家建築
- 萌芽の特性を巧みに利用した森林管理と産物
- 丹後半島における繊維利用の民俗

建築本体  
に使用され  
た樹種



小屋組に  
使用され  
た樹種



# 検証：里山における人の森林への関与

『小椋純一：絵図からみる江戸時代の京都盆地の里山景観』

『佐久間大輔・伊東宏樹 北摂と京阪奈の里山経営』

## 破綻も多発した

- ・ 都市周辺では過剰利用へ
- ・ 収奪に明け暮れ栽培や再生産・管理システム不成立
- × 近世の近江田上では、花崗岩深層風化地（低い環境容量）で地域民により過剰採取が行われ荒廃地化 → 土砂流出により農地が埋没し、水運が差し障る
- × 近世の京都では、都市の圧倒的な消費により山地が荒廃 ……保護管理策を推進するも近代まで荒廃残る

## 現代におけるシステムの衰退

- ・ 20Cに入り近世的里山資源利用システムは需要の消失とともに衰退
- ・ 桑栽培などの増大（内部・農家レベル）～植林の奨励、入会の整理（外部・社会レベル）

洪水記  
録など

# 検証：里山における人の森林への関与

『奥敬一ほか 民家の材料からみた里山利用』『大住克博・佐久間大輔 資源利用と萌芽』  
『井之本泰 京都府北部の植物繊維の利用—宮津市上世屋地区を例に—』

## 破綻も多発した

- ・ 都市周辺では過剰利用へ
- ・ 収奪に明け暮れ栽培や再生産・管理システム不成立
- × 近世の近江田上では、花崗岩深層風化地（低い環境容量）で地域民により過剰採取が行われ荒廃地化 → 土砂流出により農地が埋没し、水運が差し障る
- × 近世の京都では、都市の圧倒的な消費量が環境容量を上回り山地が荒廃  
・・・保護管理策を推進するも近代まで荒廃残る

## 現代におけるシステムの衰退

- ・ 20Cに入り近世的里山資源利用システムは衰退
- ・ 桑などの栽培の増大（内部・農家レベル）～植林の奨励、入会の整理（外部・社会レベル）

# 近畿班としての問題設定(再掲)

「持続的」な利用とその破綻を分つ条件は？

- ・ 資源供給者と利用者は、それぞれ地域共同体内部か外部か？
- ・ 資源持続に対する関心・管理の有無？
- ・ もっと他の要因？

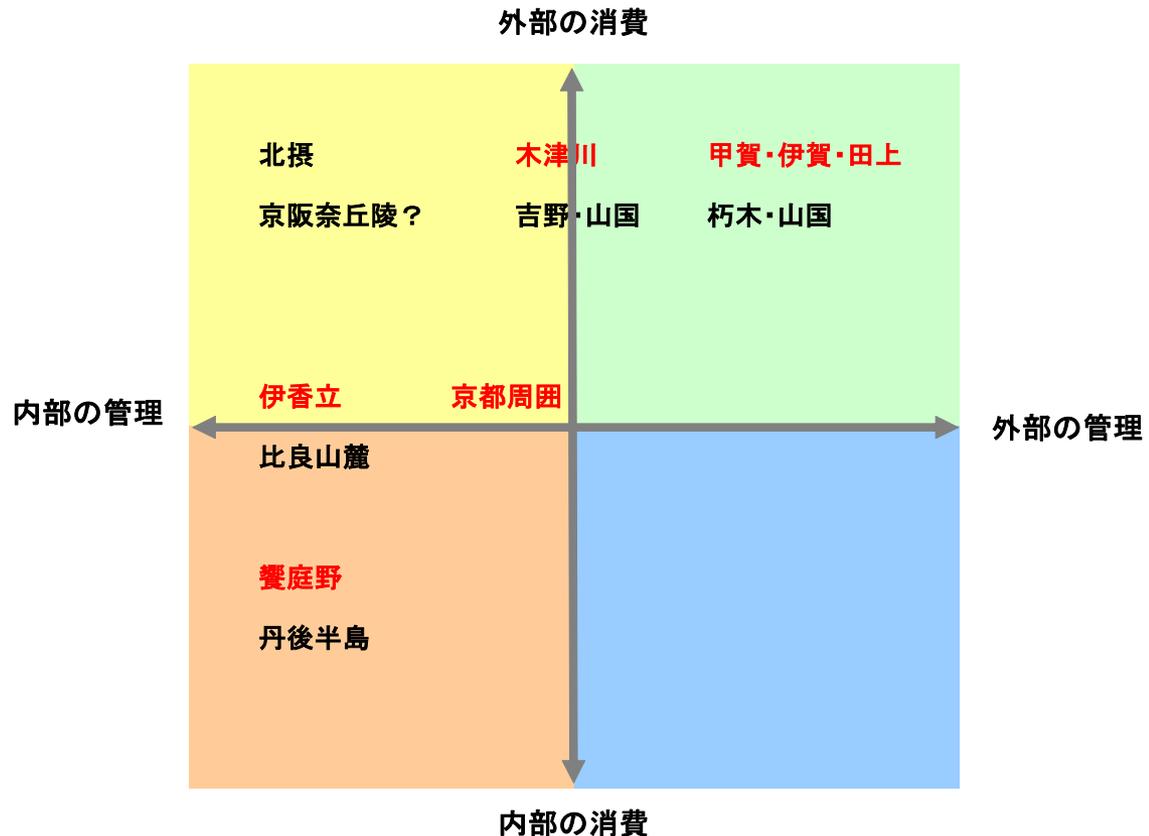
重層する環境・資源ガバナンスの存在とその役割は？

\* 近畿の森林利用の歴史を拾いつつ、奥山一里山地域で検証

# 持続／破綻を分けたもの・・・内部か外部か？

## 資源供給者・利用者の属性 - 地域内部か外部か？

- ・ 一概には言えない
- ・ 地域内部の生産と消費で持続的だった地域もあり(丹後)、破綻した地域もある(饗庭野)
- ・ 外部への移出で資源を枯渇させた事例(田上・甲賀)がある一方で、十分な環境容量(山国)や再生産システム創出(吉野・北摂)により持続的利用を形成したところも

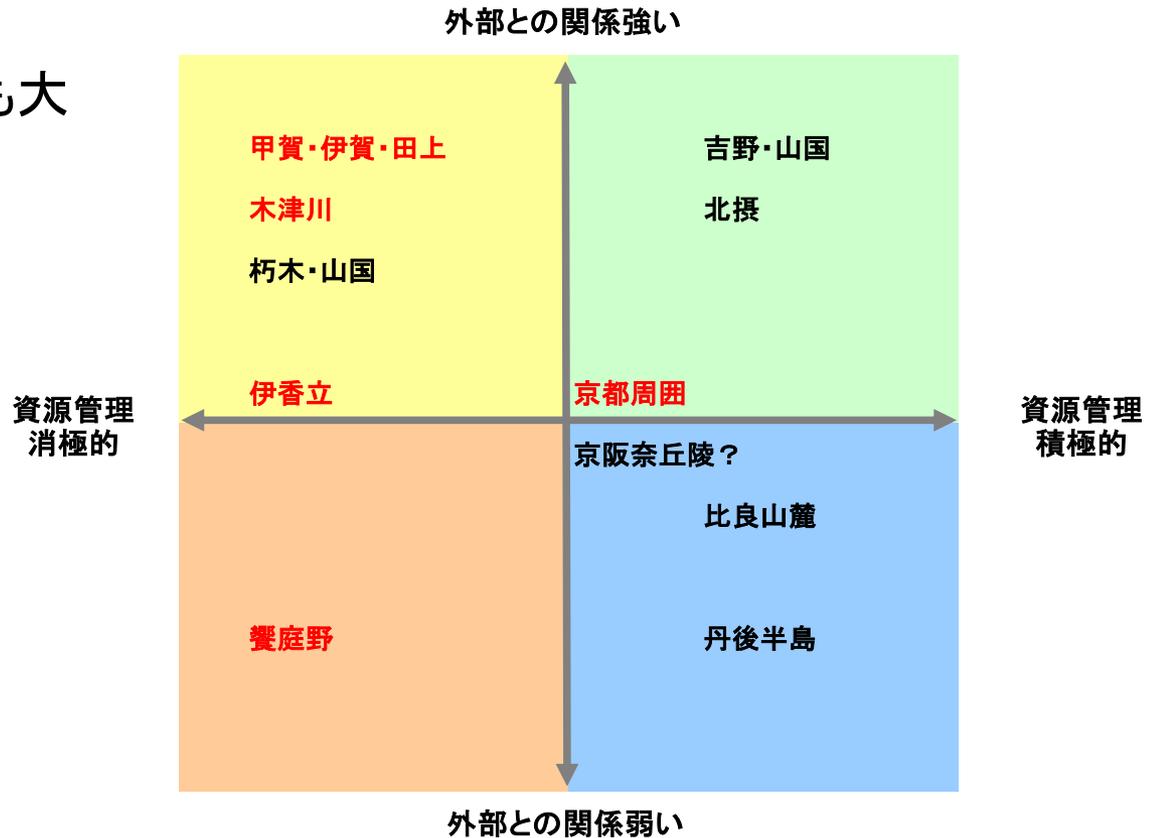


外部か内部か？ 赤字;破綻、黒字;持続

# 持続／破綻を分けたもの・・・管理・規制の強弱か？

## 資源管理・規制(秩序)の積極性

- ・ 利用規制や資源造成などの積極的な管理策は、持続的資源利用につながる
- ・ それなりの規制があっても破綻が続く(京都周辺)ことも
- ・ 消費圧や環境容量の影響も大きいのでは？



資源管理の有無は？ 赤字;破綻、黒字;持続  
消極;困り込み、積極;利用規則・計画・資源造成

# 持続／破綻を分けたもの・・・議論の限界

近畿地方を代表するサンプリングになっているか不明

- ・ 過去の乏しい史料・事例に基づく議論
- ・ 試料数が限られる
- ・ 時代が異なる

破綻の基準が分かりにくい

- ・ 破綻／持続の判定は定性的かつ相対的
- ・ どの資源に価値観を持つかで、判定基準も結果も異なる
- ・ 攪乱を緩衝する環境容量もケースごとに異なる

客観的な比較・評価はしづらい。

→ 以下、いくつかの意見

# どんな状態を「持続」と見なすか？

## 持続は相対的

- ・ 持続／破綻の基準を分かりにくくしている
- ・ 例えば、原生的な森林～荒廃地間のどの状態でも平衡が起きれば、とりあえず「持続」に見える
- ・ 対象とする資源が天然大径材／薪炭材／緑肥用の草なのかにより、持続／破綻の判断基準も判断結果も異なったものになりうる。
- ・ 対象資源も時代と共に変化するし、同一の時代、場所でも、主体により異なる  
→ 領主は森林を求め、農民は草地求めるといったことは一般的



# 近畿地方で「持続的資源利用」の成立した条件

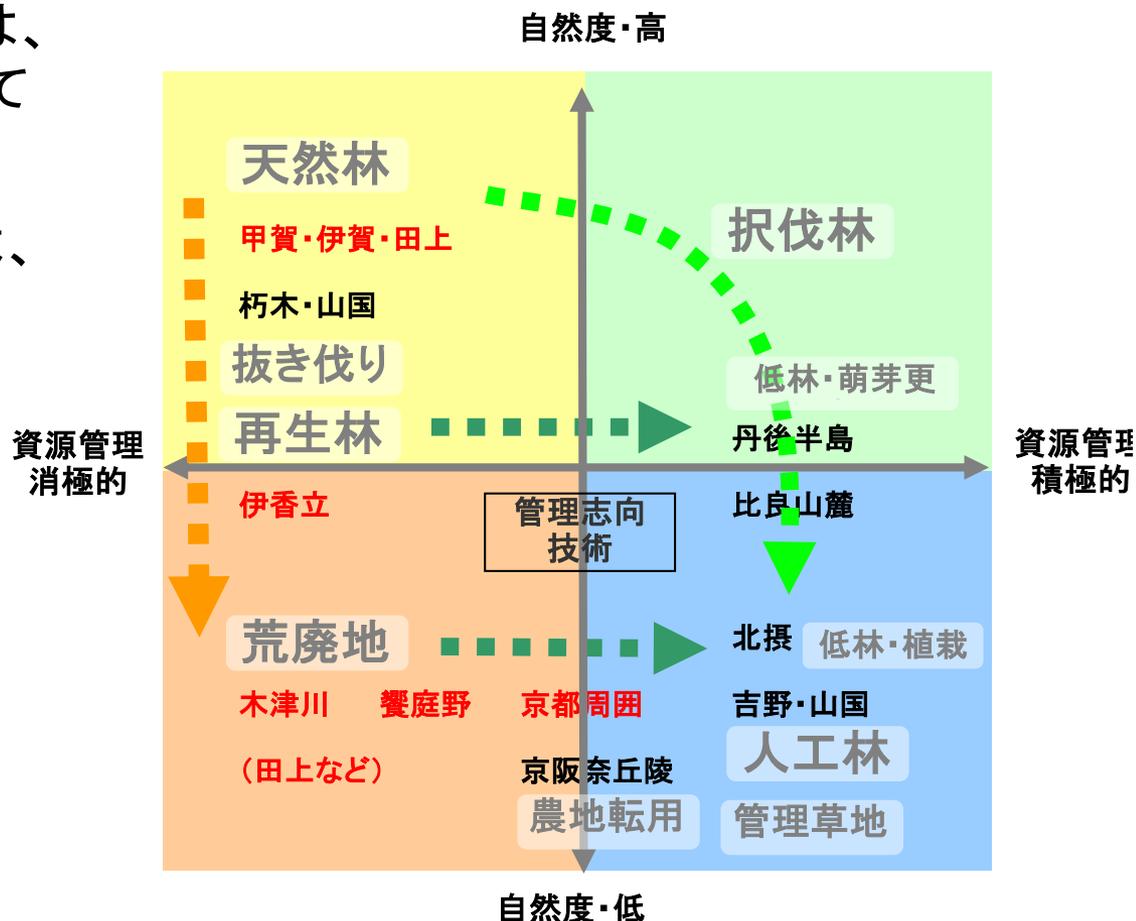
## 持続は「作り」出される

- ・ 積極的な**管理志向**は、持続的資源利用につながっていた。
- ・ さらに、新たな段階の持続は、  
+ それを支える**技術**があってこそ創出されたのでは。

→ コナラ薪炭林の成立には、規則的な伐採と、それに対応する樹木との生態的プロセスが必要。

→ 草地でさえ、良好な状態に保つためには、火入れ管理を要した。

→ 人工林

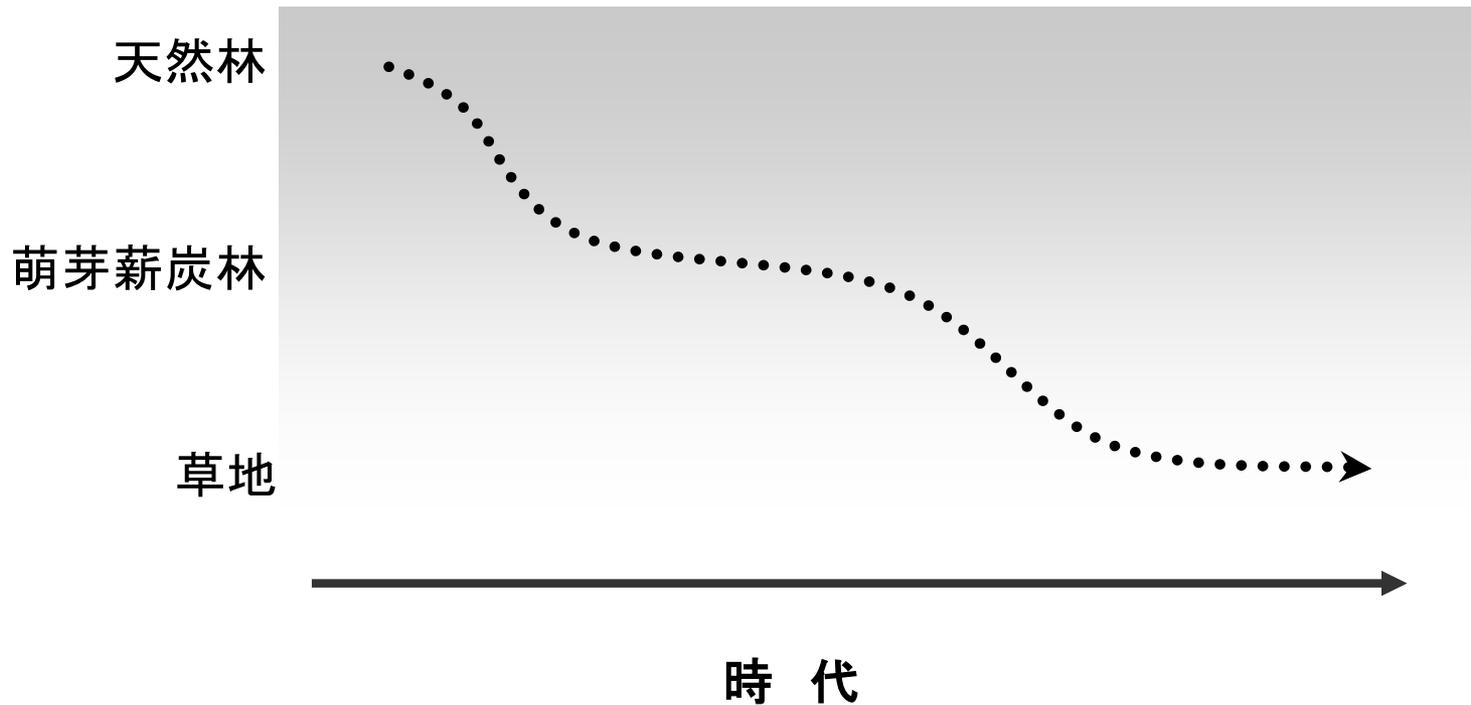


破綻／持続と遷移系列 赤字；破綻、黒字；持続  
 自然度 高；天然林、中；二次林、低；未立木地・人工林

# 「持続」状態のシフト

「持続」状態の変化は退行遷移的結果か？

- ・「持続」は次の「持続」へと推移する？
- ・非連続的では？

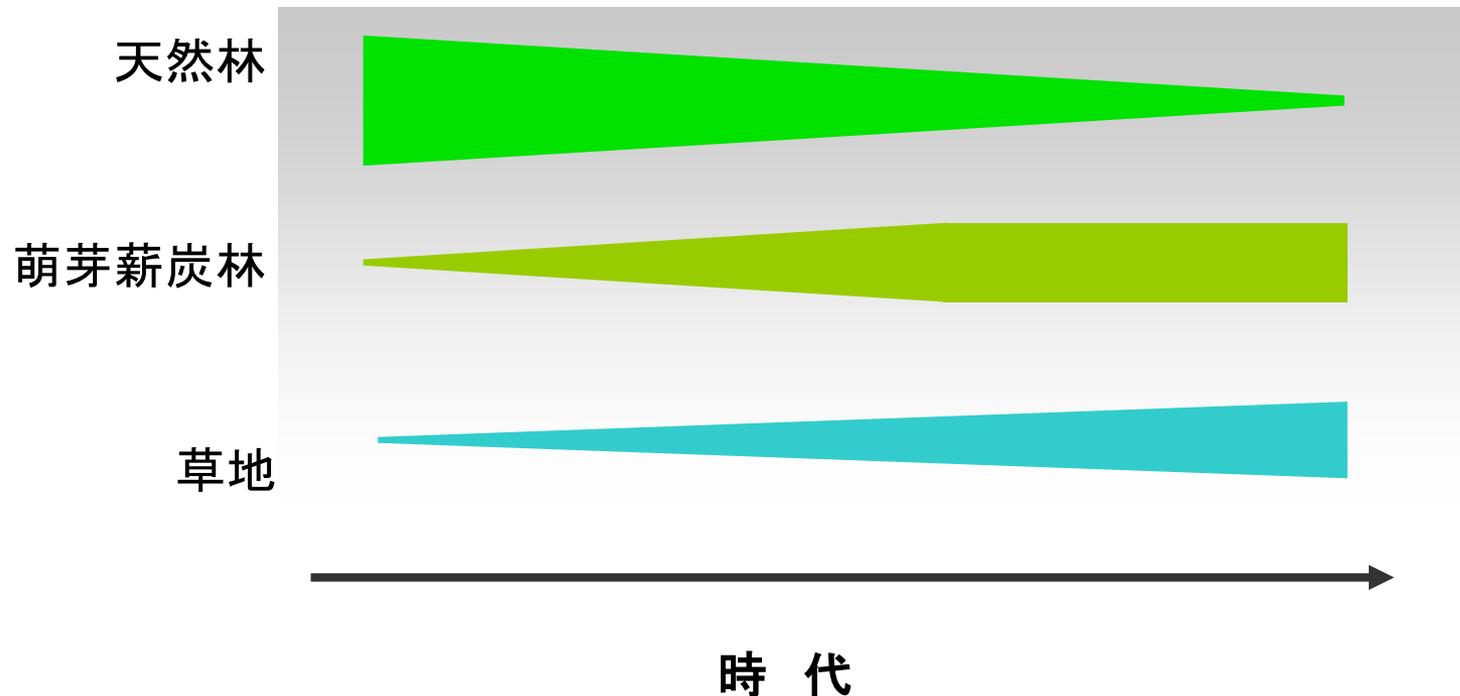


ステージを落としながら新たな持続を生み出す

# 「持続」状態のシフト

あるいは、システムの入替わり

- ・ 同じ集団が、次々と利用する資源を乗り換えていく？
- ・ 大径材と薪炭・緑肥の消費者は、社会の中で必ずしも同じ階層・集団ではない
- ・ 資源や社会の変化により、異なった生業セットを持った集団のガバナンスが消長して行くというイメージかもしれない？



異なったセットが入替わる(消長する)

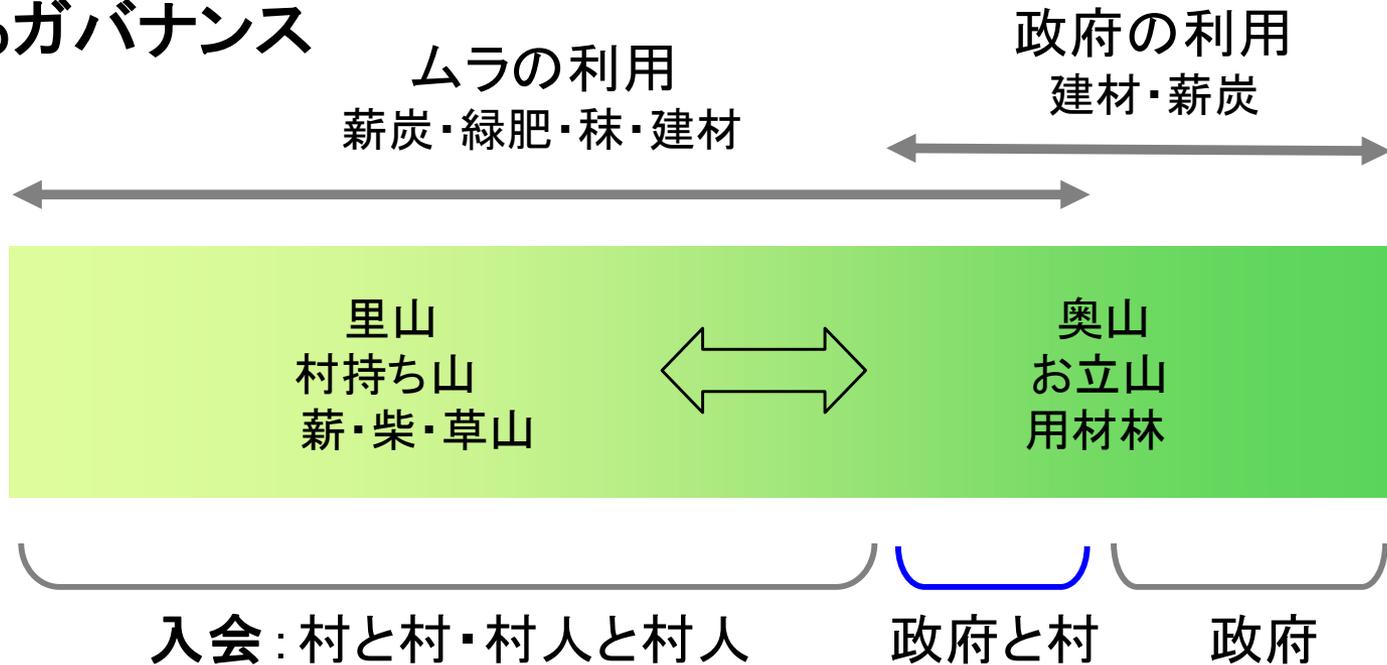
# ガバナンスの重層性と役割



## 近世における林野のガバナンス

1. お立山など天然林では、幕府や藩、あるいは利権を得た商人のガバナンスが卓越する。ただし、ムラ側による慣行的利用権も往々にして主張される
2. 薪炭林や柴・草地では、幕・藩から税や規制が課されるが、基本的にはムラのガバナンスが卓越する。 →「入り会う」のはムラとムラ

## 交錯するガバナンス



## 江戸期の資源利用とガバナンス

# とりあえずの集約

- ・ 近畿地方の森林資源は時代と共に変化した。
- ・ 奥山の天然林から里山の薪炭林、柴・草地などの様々なステージにおいて、資源の枯渇、持続性の破綻が発生した。
- ・ 破綻の発生に統一的に関与した要因は、明確には見出せなかった。特に、資源の管理者や消費者がそれぞれ地域内部／外部に所属するかということとは、関連付けられなかった。
- ・ 持続的な資源利用が成立しているところでは、規則の制定といった積極的な管理策がとられていることが多かった。
- ・ 萌芽更新や植林など再生産技術が伴うことが、持続的利用を成立させていた。
- ・ ある程度持続的利用が成立していたと考えられる近世の里山では、支配—被支配者間の重層的なガバナンスと共に、拮抗しあう地域共同体(ムラ)の交錯するガバナンスも重要であった。
- ・ 持続／破綻を分ける要因が不明確なことは、それぞれのケースにおいて、環境容量の大きさが大きく効いていることをあらわすのかもしれない。